

「チャーンゴー」研究のアポリア

戸 谷 浩

本稿では、ルーマニアのモルドヴァ地方に居住する「チャーンゴー人」と呼ばれる民族集団の歴史や社会を検討することを通して、同地での「平和」ということについても考えを及ぼしてみたい。彼らの存在は、ハンガリーとルーマニアという二つの国家、国民の間に投げ込まれてしまい、いつしか論争に主役に祭り上げられてしまった。しかし、彼らが住みつづけた都市や村落では、論争とは全く位相を異にする「平和」が、歴史的に、また日常世界のレベルから創造されてきた。そうした「平和」は、「チャーンゴー人」の如何なる知恵と営為によって生み出されてきたのか。本稿では、その知恵と営為の源泉を彼らの歴史の中に辿ってみたい。

1. 対立する二つの立場：序に代えて

「チャーンゴー」研究には、交差することなく、掘りつづけられる二つの深い「穴」が存在している。

ルーマニアはモルドヴァ地方の北西部に散居する「チャーンゴー人」の歴史・起源をめぐるでは、主としてルーマニアとハンガリーの歴史学界において、二つの相容れない立場が形成されてきた。二つの立場の内、1920年代以降、Lükő Gábor、Mikecs László、Domokos Pál Péter、Benda Kálmán らによって形作られてきたハンガリー側の「チャーンゴー人」に関する定説は、次のようにまとめることができる¹⁾。

18世紀の半ば以来、「チャーンゴー人」は、12~13世紀にモルドヴァ、ワラキアを中心に勢力を張っていたクン（クマン、ポロヴェツ）人の末裔であると素朴に信じられてきた。しかし、1880年代に、クン人の言語がチュルク系であったことが証明されると、「チャーンゴー人」はハンガリー人であるとの共通認識に反することとなり、この説は勢いを失った。代わって、「チャーンゴー人」の起源を、祖国定住 (honfoglalás) に加わず、カルパティア山脈外に留まった一群のマジャール人に求める説が主張されるようになった。現在でもこの説の影響下にある研究者がいないわけではないが、ハンガリー側の現在の定説は、1920年代に加えられた発想の転換の系譜の上にある。その発想の転換とは、「チャーンゴー人」は「東からではなく、西から、すなわちカルパティア盆地から」²⁾やってきた、という考え方のことを指している。

中世ハンガリー王国の東の国境線を監視・守備するために、セルト川に沿って村や砦が築かれたのは、13世紀に遡る出来事であったとされる³⁾。従って当時は、一般に中世ハンガリー王

国の国境とされるカルパティア山脈を東へ大きく踏み越える形で、ハンガリー人の「民族的」境界が引かれていたことになる。これらの村々や砦に入植した「チャーンゴー人」の基体に、15 世紀には、宗教裁判によって追放された南ハンガリーのフス派の人々が、16~17 世紀には、農奴の境遇を逃れようとしてカルパティア山脈を越えてきたトランシルヴァニアのセーケイ人の列が加わった。セーケイ人の人口は、さらに、1764 年の「マデーファルヴァの危機」⁴⁾以降、国境警備の役を逃れようとする人々の流入によって急激に増加したとされる。

そして、こうしたハンガリー民族を起源とするモルドヴァの「チャーンゴー人」にとって、19 世紀後半以降の時代は、ルーマニア人の国民意識の高揚、ルーマニア国家の建設、チャウシェスクに代表されるような過度の国民化政策などにより、陰に陽に、自己の民族性、言語、宗教（カトリック）の変容を強要される時代であり、それが現在に至るまでつづいているとするのが、ハンガリー側の定説の主調である。

他方、ルーマニア側の「チャーンゴー」研究も、1970 年代まではほぼハンガリー側の議論に沿う形で推移していたと言っている⁵⁾。少なくとも同じ土俵の上でなされていた双方の「チャーンゴー」研究の状況が、冒頭に掲げたような、「交差することなく、掘りつづけられる二つの深い『穴』」と形容すべき状態へと変移したのは、1980 年代に入ってからのことであった⁶⁾。ルーマニア側の「チャーンゴー人」に関する現在の定説は、1985 年に出版された Dumitru Mărtinaș の『モルドヴァのチャーンゴー人の起源』を基底にしていると断じて差し支えないであろう⁷⁾。Mărtinaș の説く「チャーンゴー人」の起源は、以下のようにまとめることができる。

Mărtinaș によれば、17 世紀末以前のモルドヴァには、「チャーンゴー人」は居住していなかったと言う。中世期の史料に言及されるモルドヴァのカトリック教徒はルーマニア系ではあったが、現在の「チャーンゴー人」に直接つながる人々ではなく、彼らは 16~17 世紀までにはほとんど全て離散するか、死滅してしまった。現在の「チャーンゴー人」の直接の祖先は、トランシルヴァニアのハンガリー社会、セーケイ社会の中でハンガリー化、セーケイ化したルーマニア人と、ハンガリー系のセーケイ人であり、彼らは全て 17 世紀末から 18 世紀にかけてモルドヴァの地に移り住んだ者たちであると主張される。「チャーンゴー人」の多くがトランシルヴァニアのルーマニア人起源であったことの証拠を Mărtinaș は、彼らの話す言語に求める。ハンガリー系のセーケイ人はたとえバイリンガルになり、ルーマニア語を話したとしても、彼らのルーマニア語はモルドヴァで習得したモルドヴァ方言のルーマニア語である。それに反し、ルーマニア人起源とされる「チャーンゴー人」が話すルーマニア語には、明確なトランシルヴァニア方言の特徴が看取され、これは明らかにモルドヴァで習得したものとは異なるのである⁸⁾。そして、「チャーンゴー人」の多くは、「トランシルヴァニアでセーケイ化されたルーマニア人から、モルドヴァでルーマニア化されたハンガリー人として描かれるようになってしまった」⁹⁾のであり、この観点からすれば、「チャーンゴー人」の言語や習俗がルーマニア化することは、決して変容や強要などではなく、本来のものに回帰しているだけのことに過ぎないと主張される。

こうした Mărtinaş の主張に対しては、主としてハンガリーの歴史学界から厳しい、時に突き放したような批判が寄せられた。

Mărtinaş は、明らかに 20 年前に執筆されているが、1985 年に出版された著書の中で次のような考えを提出している。「モルドヴァのチャーンゴー人は、実際には、トランシルヴァニアからやってきたルーマニア人である」と。これらの人々はカトリック化され、「ほぼ正確なハンガリー語」を習得し、17～18 世紀に、ローマ・カトリック教会の機関を通してマジャール化の過程が進行していたカルパティア山脈の東に移住した。彼は自身の議論の根拠を主として言語学的なデータに置き、歴史的・民俗的問題は「他の専門家」に委ねている。いかなる尺度でこの理論を査定しても、その欠陥は露呈してしまう。史料、地名学的なデータ、民俗学的・考古学的証拠の全てが、チャーンゴー人が、17 世紀以前の時代から、モルドヴァに居住していたことを示している。加えて、彼らの方言は、全く「ほぼ正確なハンガリー語」などというようなものではなく、周辺の一部の方言を除けばほぼ衰微してしまった古い特徴を示しているのである。(Baker)¹⁰⁾

さらに、ハンガリーの別の歴史家は Mărtinaş の理論を、こう評価する。

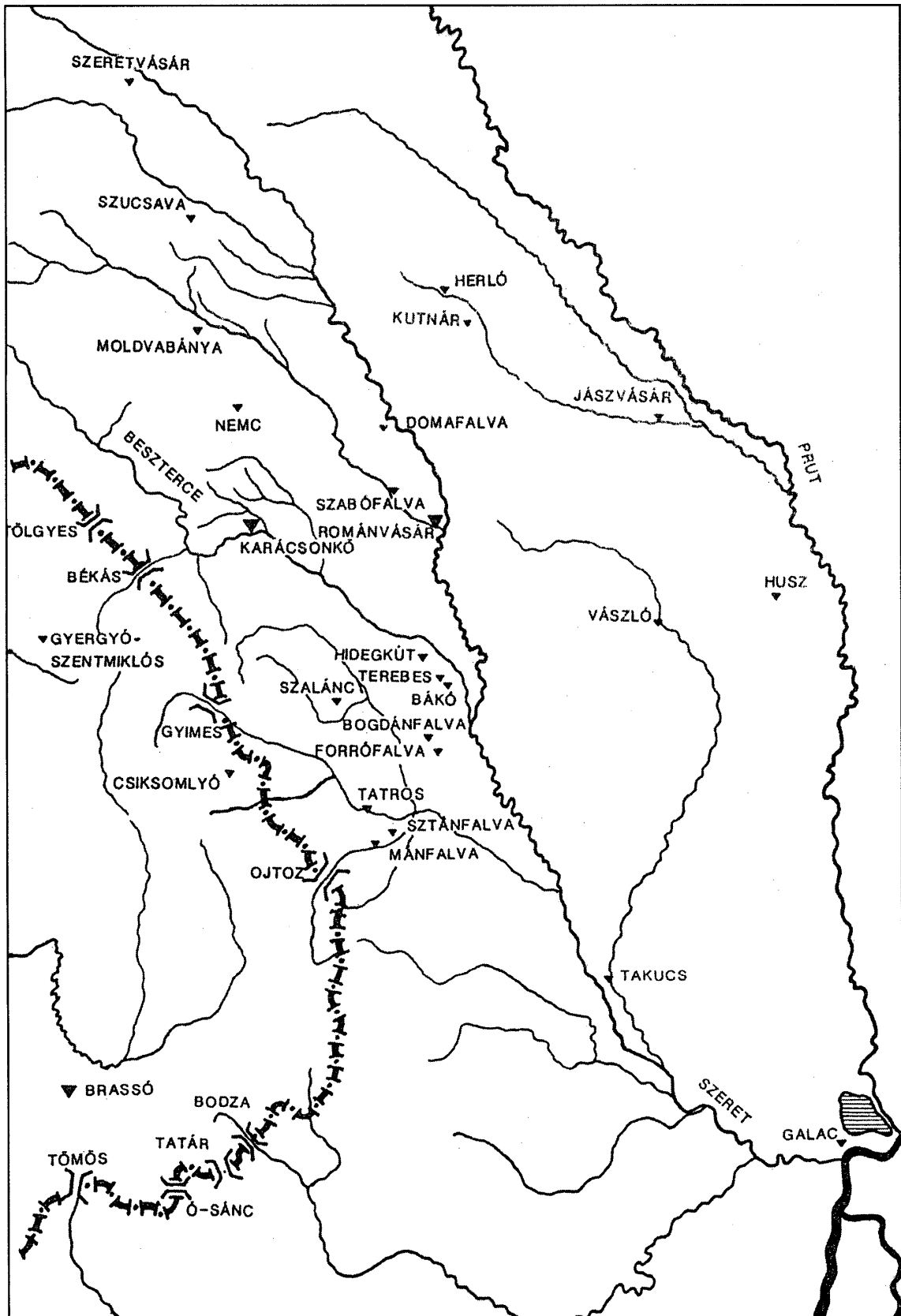
この理論——それは、チャーンゴー人の「再ルーマニア化」を正当化して憚らないが——には、学問的な基盤が欠如している。証拠として提示されている歴史的、言語学的、音声学的な論拠や民俗学的推論は、これまでの諸研究のあらゆる結論に反するものである。そのため、Mărtinaş とその後継者たちは、同時代の史料や事実やデータを存在しないものと見做している。(Benda)¹¹⁾

これらの批判に見られるように、「チャーンゴー人」の起源に関する限り、ハンガリー側とルーマニア側の立場の懸隔は著しい。冒頭で「穴」と形容したハンガリー側、ルーマニア側それぞれの「チャーンゴー」研究は、自身の議論・理論を、文字通り、深めることには熱心であるが、対立する立場に対しては互いが互いの説を全否定するばかりで、相手の議論の流れを汲んだ形で論拠の過誤を正そうとする姿勢は皆無である。すなわち、「穴」は交差することなく、掘りつづけられるばかりなのである。

本稿では、「チャーンゴー」研究のこうした本質的な欠陥——それは、ハンガリー側、ルーマニア側双方が同様に抱えているものであるが——の原因を究明した上で、今一度研究対象たる「チャーンゴー」社会の実態に立ち戻り、今後の「チャーンゴー」研究が取るべき指針をも明らかにしたい。従って、ハンガリー側、ルーマニア側のいずれの「穴」であっても、それをさらに深く掘り下げることは、小論の目的ではないことをここに確認しておきたい。

2. 多様性の限界

一般に「チャーンゴー人」の名で総称される民族集団が、「様々な時代に、多岐にわたる



地図1 16～17世紀モルドヴァの「チャーンゴール人」主要居住地

典拠：Benda Kálmán(szerk.), *Moldvai csángó-magyar okmánytár 1467-1706 I.*, Bp. 1989, 5.

様々な動機によって来訪し、広い地域に散らばりつつ、様々な状況の中に定住していった」¹²⁾ 人々であることは、ハンガリーにおいてはかなり以前から認識されていた。19 世紀前半にはすでに Gegő Elek が、“チャーンゴー人 csángók” と “モルドヴァ・セーケイ人 moldvai székelyek” を¹³⁾、世紀の半ばには Jerney János が “チャンゴー＝ハンガリー人 csangó-magyarok” と “セーケイ人 székelyek” を区別して叙述している¹⁴⁾。

「チャーンゴー人」内のこの区分は、その後も長く継承され、同様の区分を Lükő Gábor は “モルドヴァ・ハンガリー人 moldvai magyarok” と “モルドヴァ・セーケイ人 moldvai székelyek” と、Domokos Pál Peter は “チャーンゴー人 csángók” と “セーケイ人 székelyek” と表記している¹⁵⁾。

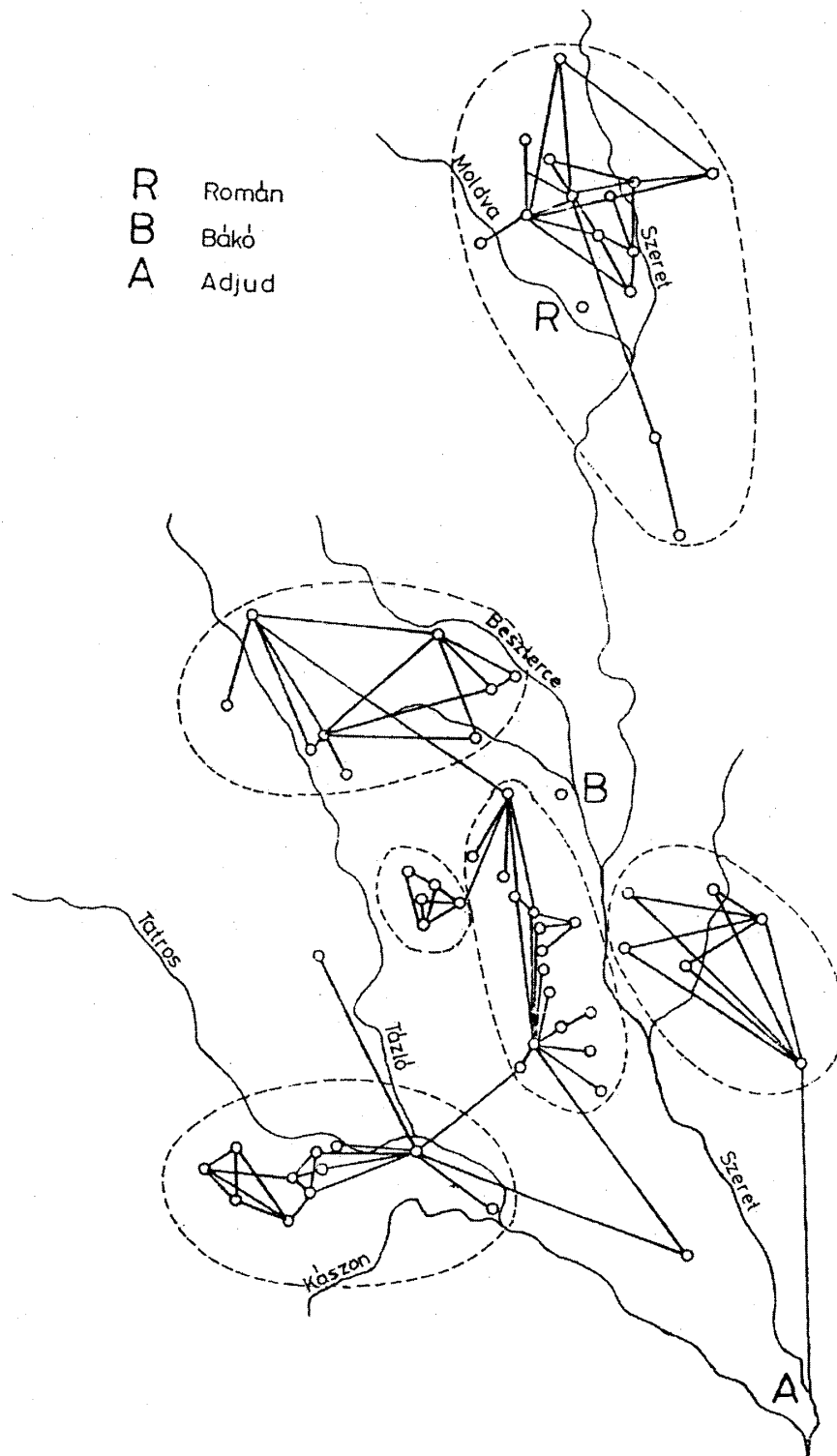
本稿でも基本的にこの区分を承認し踏襲するが、後述するように、筆者は「チャーンゴー人」にハンガリー人か、ルーマニア人かの二者択一的な民族性を無前提に被せることに懐疑的であるので、ここでは “チャーンゴー人”、“チャンゴー＝ハンガリー人”、“モルドヴァ・ハンガリー人” と称されてきた集団をチャーンゴー人、“モルドヴァ・セーケイ人”、“セーケイ人” と称されてきた集団をモルドヴァ・セーケイ人と表記したい。そして、この二つの下位集団から成る民族集団全体の総称には、「チャーンゴー人」の表記を充てることとしたい¹⁶⁾。

「チャーンゴー人」内の二つの下位集団間の差異は、概ね次のように要約される。まず、チャーンゴー人は、中世期以来モルドヴァに居住している集団とされ、自らをチャーンゴー人とも自称し、モルドヴァ川沿いの地域やバカウ (Bacau、ハンガリー名：バーコー Bákó) の周辺に集住している。他方、モルドヴァ・セーケイ人は、17～19 世紀にカルパティア山脈を越えてやってきた人々であり、言語・習俗の点で、トランシルヴァニアのセーケイ人との共通点が多く、自らをチャーンゴー人と称されることを嫌い、バカウ周辺やトロトゥシュ川、シレト川の沿岸に多く居住している (地図 1 参照)。

しかし、「チャーンゴー人」の中に二つの下位集団の存在を認めているのは、ハンガリー側だけのことではない。Mărtinaş の議論の前提も、実は「チャーンゴー人」を二つの集団に区分することから始まっている。ただし、本稿でチャーンゴー人と称する集団を、Mărtinaş は「彼らがセーケイ人でないことは明確に知られている。彼らはルーマニア人風の民族衣装を着、彼らの多くは特殊なトランシルヴァニア方言でルーマニア語を話し、ルーマニア人風の様式と慣習に従って生活している」¹⁷⁾と規定するのであり、そのハンガリー側との隔絶した認識の相違は、前章において見た通りである。

さらに言えば、「チャーンゴー人」の中に見出される多様性は、決して二つの下位集団に集約できるものではなく、Lükő は正確には “モルドヴァ・ハンガリー人” と “モルドヴァ・セーケイ人” の他に、“その他のハンガリー人” というカテゴリーを設けているし¹⁸⁾、Szabó T. Attila のように言語地理学的な側面から、「チャーンゴー人」を “北チャーンゴー人”、“南チャーンゴー人”、“セーケイ・チャーンゴー人” の三つに区分する者もある¹⁹⁾。

だが、「チャーンゴー人」という一民族集団の中に、最大限の多様性を認めようとしている



地図2 「チャーングー人」の地域的・民族的区分け

典拠：Halász Péter, Új szempontok a moldvai magyarok táji-etnikai tagozódásának vizsgálatához, in: Pozsony Ferenc(szerk), *Csángósors: Moldvai csángók a váltzó időkbén*, h. n., é. n., 52.

のは、ハンガリーの歴史家である Halász Péter であろう。Halász は「チャーンゴール人」の複数の居住地に長期間滞在すれば、誰もが彼らの「空間的・文化的な分節」がより複雑であることを認識せざるをえないとして、試みに地図 2 に見られるようなグルーピングを「チャーンゴール人」の居住地に施すのである²⁰⁾。彼は、従来なされてきた言語地理学的な観点に止まらず、主として「社会民俗学的な」資料に基づいて、「チャーンゴール人」の分節化を試みており、出自（どの村の出身か）、他の村の人々に対する村民の感情（好意的か、非好意的か）、衣装の類似・相違に関する村民の意見、婚姻の慣行などを分節の指標として用いている²¹⁾。

試験的ではあっても、「チャーンゴール人」の中にこれだけの多様性を認める Halász であれば、それでは、Mărtinaș の説も多様性の一つとして容易に承認するの可言えば、その答えは、否である。Halász は、「チャーンゴール人」内の多様性を考察するに際して、次のような前提を付している。すなわち、「モルドヴァの村落の住民は、民族と——実際的には同じことを意味するが——宗教によって、最も明確に、また最も鮮明に分かたれている」²²⁾であるとか、「紹介した観点や素描した諸地図が、モルドヴァのチャーンゴール＝ハンガリー人の最も重要な基準を覆い隠すようなことがあってはならない。彼らは、この基準に基づいて、まず何より宗教的・言語的な観点において、自らを周囲に暮らすルーマニア人から区別しているのである」²³⁾などが、それである。

すなわち、Halász の前提に従えば、ハンガリー人である「チャーンゴール人」は、その内部にいかに区分すべき多様な諸集団を抱えているとしても、彼らはまず何より「ルーマニア語を話す、正教徒のルーマニア人」からは区別されねばならない、というのである。この Halász の前提が、チャーンゴール人は「ハンガリー語も話す、カトリック教徒のルーマニア人」であるという、前章に見た Mărtinaș の主張と全く相容れないものであることは明らかであろう。

「チャーンゴール人」はハンガリー人であるとの大前提から、Mărtinaș の説を多様性の一つとしても扱わず、それを議論の枠外に置こうとしているという意味においては、同じく前章に見た Baker の Mărtinaș 批判も、Halász の前提と同様の構造を持っている。それゆえ、Baker の Mărtinaș 批判は、ハンガリー人が先か、ルーマニア人が先かの「起源問題」についての Mărtinaș への論駁にはなっても、「チャーンゴール人」の中に、Mărtinaș が唱えるようなルーマニア系住民を出自として持つチャーンゴール人が、果して、いるのか、いないのかという問題の回答には全くなっていない²⁴⁾。逆に言えば、Mărtinaș の説は、ここに生き延びる道を見出すことができ、結果として、自身の「穴」を掘りつづけることが可能となるのである。

しかしながら、Mărtinaș の説を多様性の一つとして受け入れないでいるのは、単に Halász や Baker の個人的な許容度の問題だけではないように思われる。チャーンゴール人とは「ハンガリー語も話す、カトリック教徒のルーマニア人」のことという Mărtinaș の主張を、ルーマニア系のチャーンゴール人が存在しないことを実証することで反駁するのではなく、チャーンゴール人はハンガリー人だからと封じてしまう諸研究者の所作は、ハンガリーの「チャーンゴール」研究自体が構造的に抱える、アポリアとも呼びうる思考様式に直接由来するものであるように思

われる。そして、それはまた、構造的には、ハンガリー側の定説を全否定するルーマニア側の「チャーンゴー」研究のアポリアでもあると言えるのである。

次章では、このハンガリー側、ルーマニア側双方の「チャーンゴー」研究が、共通して抱えるアポリアの構造を詳しく分析してみたい。

3. 「公式」の呪縛

「チャーンゴー人」に関するルーマニア側の基本的な立場が、1980年代に新たに形成されたのに対して、ハンガリー側のそれはかなり早くに確立し、一貫して維持されてきたと言っている。例えば、「チャーンゴー」研究の先駆者の一人である Lükő Gábor が 1930 年代に提示した彼の「チャーンゴー人」理解は、ほぼそのまま、「チャーンゴー人」に関して、現在のハンガリーで堅持されている基本的な立場と言って差し支えない。

しかし、「チャーンゴー人」に関するハンガリー側の基本的な立場は、根本的な修正を被ることなく、あまりに長く保持されてきたため、その存在自体がある種の「公式」に近いものと化してしまい、新たな視点の出現を妨げている一面もあるように思われる。本章ではまず、Lükő の「チャーンゴー人」理解が如何なるものであったのかという地点から話を説き起こし、次いでハンガリー側の「公式」の内容についても検討してみたい。

1936 年に出版された著書の中で Lükő は、その使用言語から、モルドヴァ・チャーンゴー人（本稿で言う「チャーンゴー人」）をルーマニア人から区別して認識することがひどく難しくなりつつあるとして、モルドヴァ・チャーンゴー人をルーマニア人から識別する指標として、以下の五つの点を挙げている²⁵⁾。

1. 周囲のルーマニア人 (oláhok) は全てギリシア正教徒であるが、(モルドヴァ・チャーンゴー人は) 全員がローマ・カトリック教会の信徒である。……
2. モルドヴァ・チャーンゴー人の衣装は、ほとんど全てのものが、周囲のルーマニア人のものとは異なっている。……
3. モルドヴァ・チャーンゴー人は、一般的にルーマニア人よりはるかに合理的な農業経営を行っている。……
4. (モルドヴァ・チャーンゴー人は) 人種的に、ルーマニア人とは混交しない。……
5. (モルドヴァ・チャーンゴー人は) 閉ざされた地理的単位に居住しており、その周辺部においてのみルーマニア人と混在する村で生活している。……

また、この五点を挙げるに先立って、“モルドヴァ・チャーンゴー人”を“モルドヴァ・ハンガリー人”と表記することもあると Lükő 自身が断っているように²⁶⁾、彼にとっても「チャーンゴー人」がハンガリー人であることは、議論の余地のない自明の事実であった。

従って、Lükő が「チャーンゴー人」に関する基本的な理解としてこの時掲げた指標は、以下のような図式（「公式」）にまとめることができる。

「チャーンゴ-人」=ハンガリー人=カトリック教徒=ハンガリー人の風俗・習慣=ハンガリー語 (A)

そして、上位集団である「チャーンゴ-人」について成立する「公式」(A) は、当然にその下位集団であるチャーンゴ-人についても同様に成立するので、「公式」(A) は次のように書き表すことも許される。

チャーンゴ-人 =ハンガリー人=カトリック教徒=ハンガリー人の風俗・習慣=ハンガリー語 (A')

この「公式」(A) 及び (A') は、Halász が「…民族性同定の際の二元性に際立った重要性がある。彼ら（「チャーンゴ-人」たち）は、ある程度、自分たち自身を周囲のルーマニア人と対比して同定し、また、ルーマニア人たちも、ある程度までは、彼ら自身とカトリックのハンガリー人との間に分割線を引いている」²⁷⁾と強調するように、対概念として存在し、対応する次のようなルーマニア人に関する別の「公式」の存在を常に前提としている。

ルーマニア人 = 正教徒 = ルーマニア人の風俗・習慣 = ルーマニア語 (B)

さらに第 1 章との関係で言うならば、「公式」(A) の「ハンガリー人」の項を「ルーマニア人」に置換したものが、チャーンゴ-人に関するルーマニア側の基本的な立場であった。

チャーンゴ-人 =ルーマニア人 =カトリック教徒=ハンガリー人の風俗・習慣=ハンガリー語 (C)

もちろん、「公式」(C) に該当するチャーンゴ-人の存在は、ハンガリー側の見地からはありえない。ただ、「公式」の右方に行くほど、対の「公式」の対応する項との間での置換が、より容易に生ずるようになるという事実は広く認められている²⁸⁾。もちろん、そうした置換は全て、「公式」からの「逸脱」として認識される。ハンガリー人であるチャーンゴ-人が、カトリックを信仰し、ハンガリー風の生活様式を保持しながらも、何らかの理由でルーマニア語とのバイリンガルとなること、あるいはハンガリー語を忘れ、ルーマニア語のみを話すようになることは、ハンガリー側の「公式」に照らせば、「逸脱」以外の何物でもないのである。

チャーンゴ-人 =ハンガリー人=カトリック教徒=ハンガリー人の風俗・習慣=ハンガリー語 (A')

↓ 不可能? ↓ ↓ ↓

ルーマニア人 = 正教徒 = ルーマニア人の風俗・習慣 = ルーマニア語 (B)

しかも、ハンガリー側の立場では、「逸脱」は決して自発的ではありえず、それは常に非自発的なものであり、外部から力が加わった強制的なものであると理解されてきた²⁹⁾。つまり、「逸脱」は「悲劇」にほかならなかった³⁰⁾。

ハンガリー側の研究者の主張に従えば、信仰・宗教の項の置換は、歴史的には事例も存在するものの³¹⁾、基本的にはかなり困難なものであるとされる³²⁾。民族の項の置換に至っては、Mărtinaş の説（すなわち「公式」(C)）を Tanczos Vilmos が「イデオロギー的な動機から生ま

れた説」³³⁾と一蹴しているように、ハンガリー側としては全く想定しえない事象であり、また、事実として各項の置換が生じていることが報告される中にあって、チャーンゴー人＝ハンガリー人の部分が不変であることが、ハンガリー側の基本的な立場である「公式」(A')が「公式」と称されるにたる最低限の要件であった。

それゆえ、「公式」の根幹をあからさまに侵す Mărtinaş の主張には、「学問的な根拠がない」³⁴⁾、あるいは「あらゆる学問的な根拠を欠いている」³⁵⁾などの辛辣な批判が加えられ、許されざる逸脱として全否定されたのである。要するに、前章に見た多様性の限界は、個々の研究者の許容度の問題などではなく、自らの「公式」にあくまで固執する、ハンガリーの「チャーンゴー」研究全体の体質に由来していると言うことができるのである。

しかし、「公式」(C) がルーマニア側の基本的な立場を表しているように、「公式」を墨守する体質は決してハンガリー側に限ったものではなかった。否、対立する側の主張を認めないこと、自らの主張に固執することにかけては、ルーマニア側の立場の方がより頑であると言えるかもしれない³⁶⁾。

いずれにせよ、こうした、対立する側の主張を多様性の一つとしても認めようとししない狭隘さと、自らの主張の基盤を一切疑わず、「公式」のごとくそれを墨守し、結果としてそれに呪縛される硬直性のゆえに、「穴」は交差することなく、ただひたすらに掘りつづけられるのである。それぞれが、その「穴」の深さだけを競いながら。

4. 「公式」か、社会の実態か

本稿の冒頭にも掲げたように、「チャーンゴー」研究には、交差することなく、掘りつづけられる二つの深い「穴」が存在する。チャーンゴー人(「チャーンゴー人」も可)は「ハンガリー人である」という考えと、チャーンゴー人は「ルーマニア人である」という考えは、それぞれの立場を取る人々によってあたかも「公式」であるかのような絶対性を付され、対立する立場は全否定されるばかりで、通常、正当に議論の俎上に乗せられることもなかった。ハンガリー側の立場に立つ研究者が依拠するのは、「公式」(A) と (A')、そしてそれらと対をなす「公式」(B) のみである。これに対して、ルーマニアの「チャーンゴー」研究者が認めるのは、ルーマニア人一般を語る上記の「公式」(B) と、チャーンゴー人は「ルーマニア人である」とする独自の「公式」(C) のみである。筆者が、「交差することなく、掘りつづけられる二つの深い『穴』」と形容したのは、「チャーンゴー」研究のこうした状況を鑑みてのことであった。

もちろん、双方が堅持する「公式」も、終始、絶対不変なものであるわけではない。「公式」(C) を非学問的、イデオロギー的な産物と見做すハンガリー側の立場でも、民族の項を除いて、「公式」(A') と「公式」(B) の対応する項の間での置換を、歴史的に生起してきた現実として追認している。しかし、それはあくまでも「公式」からの「逸脱」として、つまりは進行する「ルーマニア化」という名の「悲劇」として理解されたに過ぎなかった。民族の項の置換を認めないのは、自らが依拠する「公式」の存否に係わる問題のゆえであった。「公式」(A') と

「公式」(B)の民族の項の置換を認めるということは、対立する「公式」(C)の存在を認めるということでもあるが、むしろこの置換を認めることによって、「チャーンゴー人」に関するあらゆる事態が可能態となり、諸研究の共通の出発点たる「公式」が、最早「公式」たりえないことになることの方が、実ははるかに深刻な問題であった。

しかしながら、重視すべきは「公式」自体の存否ではなく、モルドヴァ社会、「チャーンゴー」社会の実態が如何なるものであるのか、歴史的に如何なるものであったのか、という点であろう。ルーマニア側が主張する「公式」(C)のようなチャーンゴー人が現に存在するのか、否かは、これまで見てきたように十分な議論がなされてきていない分、未だ定かではない。だが、虚心に考えて、モルドヴァ社会にハンガリー側の主張する「公式」に適うかに見える「チャーンゴー人」が多く存在すること、また歴史的にも多く存在してきたことは、表面的には確からしく思われる。だが、そうした大方の事実や通念に適合的な「公式」であっても、それが当該社会の真の実態にそぐわないのであれば、やはりそれを「公式」として掲げることは問題があろう。

ハンガリー側の最近の「チャーンゴー」研究では、これまで疑問視されることのなかった「公式」の絶対性に異議を唱えるものも散見されるようになった。Pávai István は、アイデンティティのレベルではあるが、強固なはずの「ハンガリー人」の項が、「ルーマニア人」に置換されうることを示した。彼は、自らを「ルーマニア人」と称する「チャーンゴー人」や、「ハンガリー人」としての確たるアイデンティティを持ちえないでいる「チャーンゴー人」の証言を多く報告している³⁷⁾。

カルパティア盆地のハンガリー人と「チャーンゴー人」のアイデンティティ構造の相違や、「チャーンゴー」社会における国民意識の欠如、置換を「逸脱」と見做さない「チャーンゴー人」の心性を説くことによって、従来の「公式」を相対化しようとする者もある。

Tánczos は、「モルドヴァ・チャーンゴー人の集団的なアイデンティティ意識の形成において、言語はカルパティア盆地内に住むハンガリー人の場合と同程度の役割を果たしてはいない。チャーンゴー人の集団アイデンティティと言語アイデンティティの間には、密接な関係は存在しない。……言語に対する象徴的な係わり方の位置は、何より共通の宗教が、さらには共通の生活様式による環境が引き受けている」³⁸⁾と語り、Hegyeli Attila は、「我々はしばしば、自分たちの文化のアイデンティティ構成要素のヒエラルヒーを、モルドヴァ・チャーンゴー人に投影しがちであり、研究を進めるうちに、別の体系には別のヒエラルヒーが有効であるかもしれないということを忘れてしまう」³⁹⁾と警句を発している。Benda を始め多くの研究者が、一般に国民意識や言語を「アイデンティティ構成要素のヒエラルヒー」の上位に置く本国のハンガリー人に対して、モルドヴァの「チャーンゴー人」たちは宗教・信仰をその最上位に置いていると指摘している⁴⁰⁾。

「チャーンゴー」社会の国民意識の欠如に関して Hegyeli は、ある「チャーンゴー」村落の住民の大多数は、「自身をハンガリー国民の一部だと思っていない——それを拒否したいと考

えているわけではなく、単純にそのことを知らず、何故に自分がそこに属さねばならないのか、一体それは何なのかが理解できない」⁴¹⁾でいると指摘する。「チャーンゴー人」のこうした国民意識の欠如は、「(「チャーンゴー人」の祖先たちが移ってきた) 当時はまだ、近代的なハンガリー国民が形成される準備が進められていたに過ぎなかった」⁴²⁾時代であったことが、その大きな理由とされている。

Tánczos は、言語の面で、上に触れた「公式」間の置換のような事象が、「チャーンゴー」社会において、より容易に生じうることの理由を次のように解説している。「例えば、モルドヴァ・チャーンゴー人たちが、ハンガリー語に何よりプラグマティックで、意思疎通の目的に適う機能を負わせていることは明らかである。すなわち、彼らは言語を集団形成の象徴的な要素とは見做さないのである。ここで問題となるのは、ブルジョア国民意識の形成以前のヨーロッパで通用していたであろう、(言語との) 古風な係わり方である。彼らはイデオロギー抜きで言語の使用と係わっているため、言語置換の現象を、ある種の悲劇的な喪失としてではなく、近代化に不可避に付随するものとして受け取るのである」⁴³⁾と。

しかし、「チャーンゴー人」たちが「プラグマティックで」あるのは、言語使用の面だけに止まらない。Hegyeli は、ハンガリーに出稼ぎ労働者として流入した「チャーンゴー人」たちの民族・宗教・言語アイデンティティの検討から、彼らの「アイデンティティの表明は、常に環境依存的で、その構成要素のヒエラルヒーも状況との相関関係において変化しうる。(彼らは)表面上、固有のアイデンティティを括弧に括り、何か外部の期待、あるいは不均整な境遇によって要求される新たな仮面を受け入れることができるのである」⁴⁴⁾との結論を導き出している。

要するに、ハンガリー側の新傾向の諸研究の要諦は、次の二点にまとめることができよう。一つに、少なくとも「チャーンゴー人」が有するアイデンティティは、民族・宗教・生活様式・言語のいずれの領域においても、カルパティア盆地のハンガリー人のそれとは内実の面で大きく異なり、構造的にも、後者を基準としたいわゆる「公式」に、そのまま従うものではないということ。第二に、「公式」間の置換のような事象は、「チャーンゴー」社会においては、決して従来のハンガリー側諸研究が想定していたような特殊な「逸脱」や、ましてや「悲劇的な喪失」などではなく、「チャーンゴー人」にとってそれは歴史的に体得した、より实际的で、日常的な行為に過ぎないという点である。

Pávai が、「チャーンゴー人」が確とした民族呼称を持たなかったり、その表現が一定しないと指摘している事実は、正にこの二点の要約に符合する。Pávai によれば、「民族呼称の欠如、あるいはこの点での表現が一定しないことは、一般に次のような事実に起因する。すなわち、ハンガリー国家の諸紐帯の外部にあり、ある別の国の中で常に少数者、新参者、余所者として扱われてきたエスニック集団の一部は、(19 世紀半ばの) 改革期以降、数度の波で燃え上がったハンガリー国民の思想運動の影響からも遠く離れており、民族的帰属の公然たる表明を、一つに重要と考えないため、二つにこの方面において数世紀にわたって現された非寛容が原因と

なった恐れのため、この(呼称を選択する)場合にも、それを拒絶するのである」⁴⁵⁾。アイデンティティ構造の異なる「チャーンゴース人」たちは、国民意識の表現の一つである民族呼称に拘泥することもなく、逆に状況に応じてそれを変化させたり、求められるようにそれを選択することを常としている、というのである。

では、これらのハンガリーにおける新たな研究動向が、前章までに述べた「チャーンゴース」研究のアポリアの解消に貢献しているのかと言えば、残念ながら、この答えも、否である。上に挙げた新たな方向を指向するハンガリーの研究者たちも、必ずしも「多様性の限界」を開き、「公式の呪縛」を解いているとはいいがたいのが実状である。

確かに、Hegyeli の次のような言葉は、従来の「公式」的な立場とは明らかに一線を画するものである。「これ（ハンガリー国民の一部であること）をモルドヴァ・チャーンゴース人たちが体得することの手助けをしたいと願う人々は、あらゆることを試みるかもしれない。だが、『彼らもハンガリー人である』ということのために、教育を積み上げるべきではないであろう。実際、彼らはハンガリー人である。しかし、それはただ我々の視角からすれば、である」⁴⁶⁾。あるいは、彼は別の箇所で、「すでに言語のカテゴリーにおいて見たように、連結名称（チャーンゴース＝ハンガリー人、チャーンゴース＝ルーマニア人）は、差異性と同一性を同時に表している。これらの名称の中には、ハンガリー人ではない（という思い）と、ルーマニア人ではない（という思い）がそれぞれ含まれている。しかし、同時にそこには、むしろハンガリー人の共同体である（という思い）と、むしろルーマニア人の共同体である（という思い）もそれぞれ含まれている」⁴⁷⁾とも語っている。

しかし、Hegyeli の言葉においても、「チャーンゴース人」は依然として多様性を捨象した総体として語られ、カルパティア盆地のハンガリー人と同一に扱うことは強く否定されてはいるものの、「チャーンゴース人」がハンガリー人であるという大前提はいささかも揺るがされてはいない。また、「チャーンゴース人」たちが抱くアイデンティティの揺れは積極的に承認されているが、それはあくまでも揺れであり、その揺れを有すること自体が、固有のアイデンティティの証であるとまでは見做されていない。結局、「チャーンゴース人」のアイデンティティは未だ「ハンガリー人」か、「ルーマニア人」かの二者択一の「公式」の世界の中で思考されているに過ぎないのである。

「公式」間の置換に関しても、ハンガリーの最近の諸研究においては、確かに、従来の見方のように、それを単純に「逸脱」や「悲劇」と規定する考えは退けられてはいるが、「チャーンゴース」社会において、置換がより容易に、またより日常的に行われることの原因としてそこで指摘される事実は、不思議なほどに共通している。そこで強調されるのは、公権力の脅威と権力への配慮という、いわゆる「政治的」な要因である。

例えば Tanczos は、16～18 世紀に、「チャーンゴース」村落の一部において、言語のみならず、その宗教までもが失われてしまった理由を、「ボヤールや侯の圧力のため、あるいは司祭不足の結果」⁴⁸⁾としているし、国勢調査などの際に、「チャーンゴース人」たちが自らの民族的帰属や

言語として「ルーマニア人」や「ルーマニア語」を選択する理由も、Pávai を始め多くの研究者は、「現地のローマ・カトリックの司祭たちの関与と公権力の脅威によって説明できる」⁴⁹⁾と考えている。Hegyeli が伝える置換の背景や「チャーンゴ」村落の現況も、ルーマニア権力との関係や当局への対応を示すことによって、「政治的」に説明される。すなわち、「彼ら（「チャーンゴ」人）たちは、地域のルーマニア権力が何を好むかを学習しており、残虐行為を回避するためにも、余所者には慎重に意見を述べるのである」⁵⁰⁾とか、「村における一般的な意見は、次のようなものである。すなわち、ルーマニア当局によって宣言された方向は、受け入れなければならない。可能な限り、権力には従わねばならない。つまり、それが生き延びてゆくための、あるいは恐らくは発展をも得ることができる唯一の可能性である」⁵¹⁾と、語られるのである。

しかし、考えてみるに、本来の「チャーンゴ」社会とは、正に相容れない二つの「公式」がそうであるように、常にルーマニア社会と対立的であったのであろうか。「チャーンゴ」人により自由に行う置換は、常に権力・権威を念頭に置いて考えねばならないような「政治的」なものであったり、「悲劇」的なものであったのであろうか。

言い換えるならば、「チャーンゴ」人たちは、常に二者択一の「公式」の世界で、総体として語られねばならないのだろうか。自由な置換は、「逸脱」や「悲劇」ではないというだけではなく、「チャーンゴ」人たちによる自発的で、より自然な選択と解することは許されないものであろうか。

次章では、これらの疑問の解答を、ハンガリー側、ルーマニア側の現在の立場を離れ、歴史的に追い求めてみたい。17 世紀半ばのモルドヴァ社会、「チャーンゴ」社会の実態を比較的良好に伝えているとされる『バンディヌスの報告 (Codex Bandinus)』を、上記のいくつかの疑問を頭の片隅に置きながら、今一度、具体的に読み返してみたい。

5. 『バンディヌスの報告 (Codex Bandinus)』

本章では、モルドヴァ社会、「チャーンゴ」社会の実態を、18 世紀初頭以前に遡って、今一度検証してみたい。

時代を 18 世紀初頭以前とするのには、主として二つの理由がある。一つは、18 世紀初頭という時期が、Benda も「1710 年代に、モルドヴァ史における新時代が始まった」⁵²⁾としているように、モルドヴァ社会にとって一つの重大な転換点であったことが挙げられる。この時期を境にモルドヴァ社会は、それまでの伝統とは明らかに一線を画する質的変容を被ってゆくことになる。Benda は、「モルドヴァ史における新時代」の具体的な意味を述べていないが、恐らくは、1711 年に始まるファナリオット（ファナリオティス）のモルドヴァ支配や、17 世紀末までに、組織体としてはほぼ解体するモルドヴァのカトリック教会の実情などが念頭にあったものと思われる⁵³⁾。

もう一つの理由は、いわゆる「近代化」の波に晒される以前のモルドヴァ社会、「チャーン

ゴー」社会を概観したいという欲求によるものである。一般にモルドヴァの僻村と言っている「チャーンゴー人」の村々にも、19世紀以降には、いわゆる「近代化」の波が押し寄せてくる。行政、学校、教会(正教会)のそれぞれの末端組織が、「チャーンゴー」村落にも浸透し、人々は様々な回路を通じて、中央に結び付けられるようになる。交通手段の改善と都市化の進行も、村固有の生活様式と文化の維持には少なからぬ影響を与えたであろう。18世紀初頭以前の社会の有り様を伝える史料であれば、少なくともこうした「近代化」による変容を被る以前の、本来の「チャーンゴー」社会の実態を、我々に示してくれるであろうと考えた。

また、18世紀初頭以前の数ある史料の中から『バンディヌスの報告 (Codex Bandinus)』を選択した理由は、それが質・量ともに、比較的よく近世期の「チャーンゴー」社会の実態を伝えるものであることに加え、その史料的な価値をハンガリー側、ルーマニア側の双方が積極的に認めているからでもある。『バンディヌスの報告』に対して Benda は、「モルドヴァ・ハンガリー人の居住地の最も充実した記録」⁵⁴⁾と最大限の評価を与えているし、Mărtinaș も、彼の言うカトリック教徒の激減期を実証する史料として何度も『バンディヌスの報告』に言及している⁵⁵⁾。

マルクス・バンディヌスはクレシェヴォ (Kreševo: ボスニア) の司教で、ローマの布教聖庁にモルドヴァにおける教会組織の現状を伝えるために、1646年11月1日から1647年1月18日まで、モルドヴァのカトリック教徒である「チャーンゴー人」の住む都市や村々を巡る旅に出、その際の記録として『バンディヌスの報告』を著した⁵⁶⁾。従って、『バンディヌスの報告』には、その土地の概略、カトリック教会の建物・財産、司祭の有無、信徒の戸数・人口、正教会の状況、カトリック教徒と正教徒との関係などが詳しく記され、さらに主な居住地については信徒の名簿も付されている。バンディヌスが言及している都市や村落の総数は41カ所に上る⁵⁷⁾。

以下、特に取捨選択することなく、ハンガリー系住民(カトリック教徒)とルーマニア系住民(正教徒)の関係についてバンディヌスが言及している箇所を、具体的に抜き出してみたい。前章の末尾に示したいくつかの疑問を心に留めつつ、バンディヌスが伝える17世紀中葉の「チャーンゴー」社会の有り様を再確認してみたい。

なお、引用は Benda Kálmán(szerk.), *Moldvai csángó-magyar okmánytár 1467-1706, I. köt.*, Budapest, 1989に依った⁵⁸⁾。各引用の末尾に、Benda によって付されたローマ数字の整理番号、居住地名、節番号を明記した。地名はハンガリー名に統一した。また、括弧内の挿入は、全て筆者によるものである。

この町の住民はハンガリー系とルーマニア系である。しかし、ハンガリー系の方がはるかに多く、あらゆる点において優越している。このため、町の最低の地区も、ルーマニア系住民に対して居住が許されていた。それにもかかわらず、役職は両者の間で次のように進められている。つまり、ある年にハンガリー系住民が判事職を担ったならば、

別の年はルーマニア系住民がこの職務に就く。彼らは、このように交替しながら、職務を請け負っている。([II.] HUS.6.)⁵⁹⁾

ルーマニア系の出身ではあるが、ハンガリー系住民の中でカトリック信仰において成長したあるカトリック教徒を、正教会主教が力づくで自らの信仰に引き戻し、再洗礼を施そうとした。この男は逃げ出し、妻や息子、ブドウ畑や家や土地をも捨て、ローマの信仰を否認するぐらいなら、むしろ死にたいと言明した。私たちは、この男にも自由を取り戻してやった。([II.] HUS.11.)⁶⁰⁾

カトリック教徒の住民は、一部はペストによって死に絶え、一部はタタール人によって暴君の哀れな奴隷にと連行され、他の一部は正教に改宗した。([III.] VASLO.2.)⁶¹⁾

かつてはハンガリー系住民が、唯一の居住者であった。しかし今では、カトリック教徒の家は 6 軒で、幼児を含めても、その人口は 18 人である。ギリシア正教に改宗した者たちもいる。なぜなら、未だかつて誰もこの村を訪れたり、気づかったりしてこなかったためである。([VII.] BOGDANA.)⁶²⁾

(奇跡が伝えられる巡礼の地で) 晩課の後に、全ての人の慰謝と教化を伴った巡礼の実践と功德についての説教があった。それから、幾人かの告解がなされた。その中には、これまで告解をしたことがないという人々も少なくなかったし、信仰において愚かな行為をしていたと思われていた人々もいた。また、正教徒たちの集会もあった。彼らの中には、自身が聖コスマス (Cosmas) や聖ダミアヌス (Damianus) の庇護を、病気やその他の危篤の時に体験したと公に告白する者も多かった。([VIII.] STANFALVA.12.)⁶³⁾

単に名目上で言えば、カトリック教徒は 680 人にすぎない。ルーマニア系住民は数では少数である。両者の間で、町の役職は平等に、交替で進められている。([XXII.] BACOVIA.41.)⁶⁴⁾

かつてはハンガリー系住民だけであったが、現在ではハンガリー系住民の家は 3 軒であり、幼児を含めて 16 人が暮らしている。彼らの中ではヤーノシュ (Ioannes) という老人以外、誰も母語ができなかった。ルーマニア系住民の家は 300 軒あり、ルーマニア系(の人口) は 800 人ほどである。([XXIII.] KARACSONKÖ.1.)⁶⁵⁾

この者たち(隠者たち)は東西教会間の論争について何も知らない。なぜなら、彼らは無学であり、真の教会を探究した諸研究に没頭せず、ある者は聖者を真似たいと

いう情熱から、幾人かの者は自分たちの罪の償いのために、また他のある者たちは世俗の災難を恐れて、これらの厳しい生活様式を選び取ったからである。カラーチョンケー (Piatra)の町の周りには、山中に修道院が多く、それぞれ全てに隠者たちがいる。
([XXIII.] KARACSONKÖ.5.)⁶⁶⁾

かつてこの町の住民は、ハンガリー系、イタリア系住民と混住するドイツ系住民だけであった。人口は 8 千人を超えていた。当時は町も柵や土塁によって固められていた。しかし現在では、幼児を含めても、カトリック教徒は 25 人だけであり、母語を忘れてしまい、言語や気質の面ではルーマニア系住民に非常に近い者が大半である。
([XXXIV.] SUCSAVIA.1.)⁶⁷⁾

現在、人気のない教会は嘆き悲しんでいる。これらの教会はかつては、秘跡の励行と民衆の参集によって賑わっていた。かなりの人々が死に、その子孫たちは正教に改宗した。生き残った家族と共にギリシア正教に移っていった者もあった。二つの害悪がモルドヴァのあちらこちらで、こうした離反を引き起こしてきた。一つは、司祭たちを通じてキリストの教えを吸収すべきであったのに、現地の言葉を話す司祭たちがいなかったこと。もう一つは、司祭たちが、その生活の乱れによって、罪に陥っていたことである。彼らは、この罪を罰せられることもなく犯しながらも、不敬を理由に正教徒たちをも罰することを望んだ。(これらの理由から) 無学な市民たちはカトリックの信仰から離反し始めた。こうした醜聞に当惑して、ある 70 代の年老いたドイツ系の住民が、死の直前に再洗礼を望んだ。シモン (Simon) 司祭は老人の決意を翻させることを望んだが、その老人は次のように答えた。「心中にこの決意を抱いたのは、12年前のことであった」と。その間多くの醜聞が起こり、そして(この老人は)カトリック信仰の、この地における徹底的な荒廃を嘆き悲しんだ。

聖ドミニコ修道会から派遣されてきたある司祭は、自身がドミニコ (Dominicus) という名であったが、少女との悪事が見咎められ、枷に繋がれ、公の恥辱の場に、相手と共に引き出された。彼は、その場から非常な労苦で抜け出し、少女と共にワラキアに逃亡した。少女の母親は、夫を恐れ、短刀で自らを刺し、哀れに死んでいった。アンドラーシュ (Andreas) という名の彼女の夫は、この一件を見て、普段はラテン語の教養を備えた人物であったが、他の多くの人々と共に正教の方に移ってってしまった。
([XXXIV.] SUCSAVIA.6-7.)⁶⁸⁾

こうした(不治の病者が治癒する)光景やカトリック信仰の紛うことなき証左によって確信を得て、多くの正教徒たちがローマ教会の懐に誘われた。しかし、救済へのこの証左によって、幾人かの不敬の人々は救済へと導かれるのではなく、怒りによって破壊

へと駆り立てられた。(モルドヴァ) 侯は、セレトの修道院 (*Serediensis monasterium*) を破壊することによって、ローマ教会の信仰を弾圧し、ハンガリー系やドイツ系住民を再洗礼して、コンスタンチノーブルの総主教に従順であるように強いるよう説かれ、そして(それを)即座に行った。(なぜなら) セレトの修道士たちは、そのペテンや悪事によってモルドヴァ全土を、すぐにもローマ教皇の輓の下に引き入れるであろう(からであった)。(〔XXXV.〕 SEREDVASAR.3.)⁶⁹⁾

カトリック教徒の大部分が、迫害の時期にルーマニア系住民の側に背いていった。だが、引き続きカトリック教徒のままでいた者たちは、コトナール (*Kuthnar*) やモルドヴァバーニャ (*Baja*) に避難した。そこには今でも、彼らの子孫たちがいる。(〔XXXV.〕 SEREDVASAR.7.)⁷⁰⁾

正教徒は石造りの教会を二つ持っている。木造のものも同数程度ある。人家は 200 軒あるが、その中で、カトリック教徒であるハンガリー系住民たちが 12 年前に住んでいたものは傑出している。彼らの死後、彼らの子孫たちはルーマニア系住民たちの中に消えていった。(〔XXXVI.〕 HERLO.5.)⁷¹⁾

この町のカトリック教徒の住民はハンガリー系で、以前は千人を超えていたが、現在では幼児を含めても 300 人を数えるのみである。彼らの一部は町の外のブドウ畑の中に住み、祭日にのみ、ごく稀に教会に通うことを常としている。また、誰なのか兵士たちもいる。彼らは、余所者なので、住民台帳には記載されていない。特に、1 年前にモルドヴァ侯の下臣に加わった、カルヴァンの病に侵された 130 人は記載されていない。(しかし) 彼らも今は説教に通い始めている。多くの人々が、醜聞や説教の減少を理由に、カトリックから正教に背いていった。(〔XLI.〕 IAS.6.)⁷²⁾

また、別のカトリック教徒たちは、むしろ悪事に耽らんがために、カトリックの信仰を放棄し、上辺はギリシア式の典礼に従っている。これはギリシア正教が彼ら自身にとって救済者に思えるからではなく、罪を犯すことに対してより大きな自由を得んがためである。こうして、妻は誠実な夫から逃れ、ルーマニア系住民かハンガリー系住民と、あるいはいかなる出自の男であっても、一緒に暮らすようになる。あるいは、夫が前の妻と別れて、別の妻を迎えるのである。(〔XLI.〕 IAS.31.)⁷³⁾

カトリック教徒たちは、たいてい教会の葬法に従って死者を葬っている。ただ、幾つかの点においてルーマニア系住民(の葬法)を真似ている。すなわち、(カトリック教徒たちも) 遺体に儀式ばらない形で食物を供えるのである。(〔XLIII.〕 ADDITIO. De

catholicorum sepultura.)⁷⁴⁾

祭りは、ダンスとなみなみと注がれたブドウ酒のグラスによって祝われる。すなわち、(ルーマニア系住民たちは) この時、生命と肉体のあらゆる享樂に大いに身を委ねるのである。この点では、非常に多くの場所で、神のご加護によって、我々の訓示やイエズス会の活動が、カトリック教徒たちの邪悪な慣習を正してきたにもかかわらず、カトリック教徒たちの多くも、ルーマニア系住民たちの習慣を、現在に至るまで受け継いでいる。([XLIII.] ADDITIO. De jejuniis et festis.)⁷⁵⁾

当地 (チェベルチェク Csöböröcsök) におけるカトリック教徒の人口は、幼児を含めて 200 人である。彼らはハンガリー語、ルーマニア語、トルコ語、タタール語ができる。そのため、チェベルチェク (Csöböröcsök [sic]) 人の肩書きだけで、タタールやトルコを通して、どこへでも自由に行き来ができる。([XLIII.] ADDITIO. De oppido Csöböröcsök.)⁷⁶⁾

6. 結

第 4 章の末尾に示した疑問を、ここに今一度掲げれば、それは次のようなものだった。

- ・ 本来の「チャーンゴ」社会は、「公式」がそうであるように、常にルーマニア社会と相容れず、対立的であったのであろうか。
- ・ 「チャーンゴ人」たちは、常に二者択一の「公式」の世界で、総体として語られねばならないのだろうか。
- ・ 「チャーンゴ人」がより自由に行う置換は、常に権力・権威を念頭に置いて考えねばならないような「政治的」なものであったり、「悲劇」的なものであったのであろうか。
- ・ 自由な置換は、「逸脱」や「悲劇」ではないというだけではなく、「チャーンゴ人」たちによる自発的で、より自然な選択と解することは許されないものであろうか。

バンディヌスが伝える 17 世紀中葉の「チャーンゴ」社会の実態は、上の疑問の一部にでも解答を与えたであろうか。もちろん、筆者はバンディヌスの史料だけをもって、これらの疑問全てに、最終的な解答を与えるべきであるとは考えてもいないし、それはまた不可能なことでもあろう。しかし、バンディヌスの記述からは、これらの疑問が全般的な外れで、無意味なものなどではなく、少なくとも「チャーンゴ」研究を進めてゆく上で、意識の上の乗せておく価値のあるものであることは、十分に読み取れたように思われる。

筆者には、ハンガリー本国とは全く異なる環境の中、350 年以上も前から、ルーマニア系住民との間に柔軟な関係を保ってきている人々を、いつまでも「ハンガリー人」として繋ぎ止めておくことに相応の妥当性があるようには思われない。それは、自らを「チャーンゴ人」と称する人々についてはもちろんのこと、比較的新しくモルドヴァに移ってきたモルドヴァ・セ

ーケイ人についても、事情は同じであると考え。しかし、だからと言って筆者は、「チャーンゴー人」を「ルーマニア人」と見做すべきという考えに同意するものでも全くない。

「チャーンゴー人」と称される人々は、その起源・背景こそ多様であるが、彼らによって築かれてきた社会は、多様なるがゆえに、「ハンガリー人」か、「ルーマニア人」かの議論に馴染むものではなく、逆に、ルーマニア系住民と常に何らかの関係を保たねばならないなど、この社会が有する同一の歴史・文化世界・生活様式が存在を勘案するならば、そこに暮らす人々は固有のアイデンティティを持つ、固有の一民族集団と見做されるのが、最も妥当であると考え⁷⁷⁾。

バンディヌスが置換について記した記述の多くは、必ずしも権力に強いられただけではなく、状況に応じて、自由かつ柔軟に置換を選択する人々の姿や、ごく私的な理由から、最も困難なはずの宗教・信仰の項の置換をも決断する人々の姿を伝えていた。これは、「チャーンゴー」社会が、Halász が強調するような、他者が自己を、自己が他者を規定するというような対峙的な二元性の世界ではなく⁷⁸⁾、眼前に選択可能なもう一つの選択肢が常に存在しているというような共生的な二元性の世界と解されるべきことを、物語っているのではなかろうか。ルーマニア系の住民の中にも、宗教・信仰の項の置換を決断する人々がいたというバンディヌスの記述は、こうした共生的な二元性の世界の存在を裏付けているように思われる。

本稿における議論を踏まえるならば、これからの「チャーンゴー」研究は、少なくとも真の意味での多様性を獲得し、また、従来のいかなる「公式」の呪縛からも解き放たれたものとならなければならないはずである。そこでは、「チャーンゴー人」は二者択一の世界から離れ、ハンガリー人でも、ルーマニア人でもない固有の一民族集団と見做されることになる。しかしながら、「チャーンゴー人」を一つのまとまった民族集団と見做すと言っても、一方で、人々が行う民族的帰属・宗教・言語の選択（すなわち置換）全てにはその可能性が認められるのであり、また、「チャーンゴー人」という総体ではなく、個々の村々や個々の地域の歴史や文化の固有性こそが尊重されねばならないのである⁷⁹⁾。従って、そうした中から生み出されるこれからの「チャーンゴー」史とは、「チャーンゴー」史としての全体のまとまりを保ちつつも、最終的には、個々の下位集団、個々の村々、個々の地域の歴史の集成としてしか成り立ちえないものとなるのであろう。

注

- 1) Lükő Gábor, *A moldvai csángók I: A csángók kapcsolatai az erdélyi magyarsággal*, Bp., 1936; Mikecs László, *Csángók*, Bp., 1941; Domokos Pál Péter, *A moldvai magyarság*, Bp., 1987³ (Csíksomlyó, 1931); Benda Kálmán, Csöböröcsök: Egy tatárországi magyar falu története a 16-18. században, *Századok*, 1985 4. sz., 895-916; *Idem* (szerk.), *Moldvai csángó-magyar okmánytár 1467-1706 I-II*, Bp., 1989 (以下 okmánytár と略す)。

ハンガリー側の定説については、特に次のものを参照した。Zsoldos Attila, Túl a feledés határán: Gegő Elek és a moldvai magyarság kutatásának kezdete, in: Gegő Elek, *A moldvai magyar telepkekről*,

Buda, 1838 (1987), 167-179; Benda Kálmán, A moldvai magyarok (csángók) a XVI-XVII. században, in: *Idem* (szerk.), *okmánytár I*, 1989, 9-51 (以下 A moldvai magyarok (csángók) と略す); Tánzcos [sic] Vilmos, A moldvai csángók lélekszámáról, in: Pozsony Ferenc (szerk.), *Csángósors: Moldvai csángók a változó időben*, h.n., é.n., 7-11.

「チャーンゴール人」に関する邦語文献は、チョマ・ゲルゲイ (田代文雄監修・糸栄美子訳) 『モルドヴァのチャーンゴール人』恒文社, 1995 年がある。これには、次の解説も付されている。田代文雄「東欧の消えゆく民族、チャーンゴール」, 145-150 頁。

- 2) Tánzcos [sic], i.m., 8; Benda, A moldvai magyarok (csángók), 14.
- 3) Benda, A moldvai magyarok (csángók), 16-17; Tánzcos [sic], i.m., 8. イギリスの研究者である Robin Baker は、「チャーンゴール人」の起源を、ラヨシュ 1 世の治世 (1342~82 年) に盛んになる入植運動に置いている (Robin Baker, "On the Origin of the Moldavian Csángós," *Slavonic and East European Review*, No.4 1997, 658-680)。
- 4) マリア=テレジアによる国境警備役の強要に反対し、マデーファルヴァに集結していたセーケイ人たちを、皇帝の派遣軍が急襲し、数百人を虐殺した事件。
- 5) Benda, A moldvai magyarok (csángók), 12-18.
- 6) U.o., 18-20.
- 7) Dumitru Mărtinaş, *Originea ceangăilor din Moldova, Bucureşti*, 1985; *Idem, The Origins of the Changos*, Iaşi/Oxford / Portland, 1999. (以下 *The Origins* と略す。本稿における引用・参照等は、英訳本の頁数を表記する)。
- 8) 「チャーンゴール人」に最も特徴的とされるのが、/ş/ (ハンガリー語では/s/) を/s/ (ハンガリー語では/sz/)、/j/ (ハンガリー語では/zs/) を/z/ (ハンガリー語でも/z/) と発音する言語的慣行である。Mărtinaş の『モルドヴァのチャーンゴール人の起源』の第 2 部は、大半がこれらの言語学的特徴の解説に費やされている (Mărtinaş, *The Origins*, 109-154, 168-172)。
- 9) *Ibid*, 120.
- 10) Baker, *op.cit.*, 664.
- 11) Benda, A moldvai magyarok (csángók), 19.
- 12) Dr.Kós Károly, *Tájak, falvak, hagyományok*, Bukarest, 1976, 104.
- 13) Gegő, i.m.
- 14) Jerney János, *Jerney János keleti utazása a magyarok őshelyeinek kinyomozása végett. 1844 és 1845. I-II*, Pest, 1851.
- 15) それぞれの主著は注 (1)に掲げた。
- 16) 「チャーンゴール人」内の区分に関しては、Benda, A moldvai magyarok (csángók), 14-18; Domokos, i.m., 124-128; Halász Péter, Új szempontok a moldvai magyarok táji-etnikai tagozódásának vizsgálatához, *Kriza János Néprajzi Társaság Évkönyve* 5, 1997, 7-9. (なお、Halász の同論文は Pozsony (szerk.), i.m., 33-53 に再録されているが、本稿では前者の頁数を表記する); Tánzcos [sic], i.m., 7-8 を参照。
- 17) Mărtinaş, *The Origins*, 18.
- 18) Lükő, i.m.
- 19) Szabó T. Attila, Kik és hol élnek a csángók? in: *Idem, Nyelv és múlt: Válogatott tanulmányok, cikkek III*,

Bukarest, 1972, 122-131.

- 20) Halász, i.m., 7-26.
- 21) U.o., 10-12.
- 22) U.o., 12.
- 23) U.o., 25.
- 24) Baker の Mărtinaş 批判については、第 1 章を参照のこと。
- 25) Lükő, i.m., 11-15. (括弧内の挿入は筆者による). Lükő が掲げたこれらの指標を Mikecs は、そのまま自著に引用している (Mikecs, i.m., 189-190)。
- 26) Lükő, i.m., 11.
- 27) Halász, i.m., 12. (括弧内の挿入は筆者による).
- 28) 例えば、Lükő が、「チャーンゴール人」がハンガリー人であることを自明としていた事実と、「チャーンゴール人」のハンガリー語使用・保存に危機感を抱いていた事実を想起されたい。
- 29) 第 4 章で詳しく見るように、従来の研究が墨守する「公式」の絶対性に懐疑的なハンガリーの一群の研究者たちも、「逸脱」を非自発的で、外部の力による強制的なものとする点では、従来の思考の延長線上にある。
- 30) 東欧史という文脈では、対象や視角は本稿のそれとは全く異なるが、近代に創成された国民とナショナルヒストリーの「図式」を批判的に論じた割田聖史『『地域』の歴史を叙述すること——『ポーランド・ウクライナ・バルト史』を中心に』『東欧史研究』第 22 号, 2000 年 3 月, 64-70 頁に、本章の議論と重なる部分が多い。
- 31) Tánzcso[sic], i.m., 7.
- 32) 現在においても、宗教・信仰を「チャーンゴール人」の共同体・文化・アイデンティティの核であるとするハンガリーの研究者は多い。例えば、Zsoldos, i.m.; Benda, A moldvai magyarok (csángók), 40-41; Tánzcso[sic], i.m., 23; Hegyeli Attila, Hat nemzetiség egyetlen faluban? Egy moldvai csángó falu etnikai identitásáról, in: Pozsony(szerk.), i.m., 91-94. (以下 Hat nemzetiség と略す) を参照。
- 33) Tánzcso の Mărtinaş 批判の全文は、次の通りである。
「モルドヴァ・チャーンゴール人をカトリック教会によってハンガリー化されたルーマニア人と見做すルーマニアの見解は、あらゆる学問的な根拠を欠いている。このイデオロギー的な動機から生まれた説は、現在においては、チャーンゴール人の『再ルーマニア化』に寄与することには適っている。歴史的な文書、地名・人名に関する資料、民俗学的な諸事実は、モルドヴァの一定の地域——主にカルパチア山脈の峠の入口に位置する溪谷、すなわち軍事的・戦略的な観点から重要性の高い場所——では、ハンガリー系の民族集団の存在が、ルーマニア人の定住に先行していたことを実証している。」(Tánzcso[sic], i.m., 8.)
- 34) Benda, A moldvai magyarok (csángók), 19.
- 35) Tánzcso [sic], i.m., 8.
- 36) Mărtinaş の英訳本には、Vasile M. Ungureanu、Ion Coja、Laura Treptow による編者注が付されているが、著者の主張以上に強い偏向が感じられる。
- 37) Pávai István, Etnonimek a moldvai magyar anyanyelvű katolikusok megnevezésére, in: Pozsony (szerk.), i.m., 69-82.
- 38) Tánzcso [sic], i.m., 23.

- 39) Hegyeli, *Hat nemzetiség*, 94.
- 40) 注 (32) を参照。
- 41) Hegyeli, *Hat nemzetiség*, 94.
- 42) U.o., 91. (括弧内の挿入は筆者による)。
- 43) *Táncos* [sic], i.m., 23. (括弧内の挿入は筆者による)。
- 44) Hegyeli Attila, “Mint a gomba, ide benőttek...”: Moldvai csángók vendég-munkája Magyarországon, in: Pozsony (szerk.), i.m., 166. (括弧内の挿入は筆者による)。
- 45) Pávai, i.m., 79. (括弧内の挿入は筆者による)。
- 46) Hegyeli, *Hat nemzetiség*, 94. (括弧内の挿入は筆者による)。
- 47) U.o. (括弧内の挿入は、「連結名称」直後のもの以外は、筆者による)。
- 48) *Táncos* [sic], i.m., 7.
- 49) Pávai, i.m., 79.
- 50) Hegyeli, *Hat nemzetiség*, 89. (括弧内の挿入は筆者による)。
- 51) U.o., 87.
- 52) Benda, *A moldvai magyarok (csángók)*, 49.
- 53) U.o., 40-48.
- 54) U.o., 24.
- 55) Mărtinaş, *The Origins*, 34, 36, 38-39, 40, 87, 95.
- 56) Benda, *okmánytár I*, 347-349. バンディヌスを始めとする、ボスニアのフランチェスコ修道会士たちの活動については、Tóth István György, Szent Ferenc követői vagy a szultán katonái? Bosnyák ferencesek a hódoltági misszióban, *Századok*, 2000 4.sz., 747-799。
- 57) U.o., 350-454.
- 58) U.o. 訳出するにあたっては、Domokosのハンガリー語への試訳も参考にした (Domokos, i.m., 334-479)。
- 59) *Incolae hujus oppidi sunt Ungari et Valachi, sed multo plures Ungari, et in ombinus[sic] priores, unde infimam etiam partem oppidi Valachis inhabitandam concessere. Nihilominus sic inter illos officia currunt, ut si uno anno judicem Ungarus agit, altero Valachus eodem munere fungatur, sic mutatis vicibus alternatim munia obeunt. ([II.] HUS.6, 354.)*
- 60) *Catholicum a Valachis oriundum, sed inter Ungaros in fide catholica educatum schismaticus episcopus per vim ad suum schisma trahere et rebaptizare laborabat, is profugiens, uxorem, filiolum, vineas, domum, agros reliquit et protestatus est quod libentius vitam dare, quam fidem romanam velit abjurare; hunc etiam suae libertati restituimus. ([III.] HUS.11, 355.)*
- 61) *Populus catholicus partim peste consumptus, partim a Tartaris in miseram ac tyrannicam servitutem abductus, partim ad schismaticos defecit. ([III.] VASLO.2, 357.)*
- 62) *olim Ungari soli erant inquilini, jam vero sex domus catholicorum et personae cum parvulis octodecim numerantur, alii ad Graecorum schisma transiere, eo quod pagus iste a nullo unquam ante perlustratus aut curatus fuit. ([VII.] BOGDANA. 361.)*
- 63) *Concio habita post vespas de usu et fructu peregrinationum cum omnium consolatione ac aedificatione, deinde nonnullorum confessio audita, inter quos non pauci erant, qui nunquam antea fuerant confessi,*

alii in fide hallucinantes corroborati, eitam[sic] schismaticorum erat concursus, a quibus multi palam fatebantur, se Sanctorum Cosmae et Damiani patrocinium, in morbis et aliis periculis, expertos. ([VIII.] STANFALVA.12, 363.)

- 64) Animae catholicorum nudo tantum nomine sunt 680. Valachi vero sunt in minori numero, inter quos civitatis officia pari pede et alternatis vicibus currunt. ([XXII.] BACOVIA.41, 382.)
- 65) Olim erat mere ungaricum, jam vero tres domus Ungarorum, quas cum parvulis decem et sex inhabitant, ex quibus non nisi quidam seniculus Ioannes nativam novit linguam. Domus valachicae sunt trecentae, Valachi circiter octingenti. ([XXIII.] KARACSONKÖ.1, 387-388.)
- 66) Nihil isti de controversia orientalis et occidentalis ecclesiarum norunt, cum sint rudes, nec indagandae verae ecclesiae studiis addicti, sed aliqui sanctos imitandi affectu, nonnulli pro satisfactione suorum peccatorum, alii calamitatibus mundanis exterriti, hanc asperam vivendi rationem sibi elegerunt. Circa oppidum Piatra sunt multa monasteria intra montes, et unumquodvis suos habet eremicolas. ([XXIII.] KARACSONKÖ.5, 389.)
- 67) Olim meri Saxones intermixtis Ungaris et Italis erant cives, qui ultra octo millia numerabantur, quo tempore civitas quoque vallo et aggere munita erat. Iam vero una cum parvulis viginti quinque catholici, nativae linguae obliti, lingua et indole Valachis similiores supersunt. ([XXXIV.] SUCSAVIA.1, 399.)
- 68) Viduae nunc Sucsavienses ecclesiae lugent, quae olim sacramentorum administratione et populi frequentia florebant, nonnullis mortuis, eorum posteriores ad schismaticos defecerunt, alii una cum familia superstites post Graecorum schisma abierunt. Duo mala has defectiones hic et alibi in Moldavia pepererunt, tum quia sacerdotes suae linguae non habuerunt, a quibus christianam doctrinam hausissent, tum quia vitae foeditate duces erant ad vitia, quae cum impune patrarent, ipsosque schismaticos ob scelera puniri viderent, rudes cives a catholica fide abalienari coeperunt. Talibus infatuatus scandalis quidam septuagenarius senex Saxo, paulo ante mortis articulum rebaptizari voluit, quem a proposito detertere volens P.Simon, respondit: Ante duodecim annos hoc in animo propositum habuisse; intra hoc tempus plurima accidere scandala, et catholica fides ultimam quasi ruinam in his partibus ingemuit.
Quidam religiosus pater e familia Sancti Dominici, et ipse Dominicus appellatus, in scelere cum puella deprehensus, ac in numellam, publicum infamiae locum, simul cum complice positus; unde admodum aegre liberatus, una cum puella in Transalpiniam fugit; puellae mater suum maritum timens, cultro semet confodit et misere periit. Maritus ejus, nomine Andreas, viso tali exemplo, alias literis latinis instructus, et ipse et multi alii ad schismaticos transiere. ([XXXIV.] SUCSAVIA.6-7, 400-401.)
- 69) Hoc spectaculo et catholicae fidei infallibili testimonio victi schismatici ad Ecclesiae Romanae gremium multi veniebant; verum hoc salutis argumento impii quidam non moti ad salutem, sed commoti ira ad perniciem, principi svasere ut diruto Serediensi monasterio, suppressa fide Romana ad Constantinopolitani patriarchae obedientiam Ungaros et Saxones rebaptizatos compelleret, et in hoc tempestive faceret, monachi Seredienses suis praestigiis et maleficiis brevi totam Moldaviam sub jugum Romani Pontificis trahent. ([XXXV.] SEREDVASAR.3, 401-402.)
- 70) Populus catholicus magna ex parte ad Valachos tempore persecutionis defecit. Qui vero constanter perseverare, ad Kuthnar vel Bajam se recepere, ubi eorum posteriores adhuc perdurant. ([XXXV.] SEREDVASAR.7, 402.)

- 71) Schismaticorum lapidea templa sunt duo, et lignea totidem, domus vero ducentae inter quas praecipuae sunt quas ante duodecim annos catholici Ungari incolere, iisque mortuis, posterius ad Valachos defecere. ([XXXVI.] HERLO.5, 404.)
- 72) Populus catholicus in hac civitate est ungaricus, qui prius capita numerabat ultra mille, hoc tempore cum parvulis trecenta recenset; quorum pars una in vinetis extra civitatem habitat, diebus solum festis rarissime ad ecclesiam venire consuevit. Sunt etiam aliqui milites, qui cum sint advenae, non referuntur in catalogum populi, praesertim centum triginta Calviniana tabe infecti, qui ante annum ad obsequia principis advenierunt, et jam conciones frequentare coeperunt. Multi a numero catholicorum ad schismaticos defecerunt ob scandala et defectum concionis. ([XLI.] IAS.6, 410.)
- 73) Alii vero, ut suis sceleribus magis indulgeant, catholicam abjiciunt fidem, et graecos ritus simulate sequuntur, non ideo quia ipsis graeca religio salvifica videtur, sed ut majorem peccandi licentiam nanciscantur. Sic mulier profugiens ab honesto marito, se associat Valacho aut Ungaro, vel cujuscunque nationis viro, aut vir, repudiata priori uxore, sibi alteram associat. ([XLI.] IAS.31, 420.)
- 74) Catholici plerumque ecclesiae ritu suos sepeliunt mortuos, solum in quibusdam Valachos sequuntur, nimirum quod exequias et mensas eodem prorsus modo instruant. ([XLIII.] ADDITIO. De catholicorum sepultura, 453.)
- 75) Festa choreis et poculis vino fluentibus celebrant, tunc enim maxime effusi ad omnem vitae et carnis voluptatem. In his quoque Valachorum mores multi adhuc catholici aemulantur, quamvis in plerisque locis, Deo adjuvante nostra ordinantia et Societatis Jesu labor, praevalens catholicorum usus emendavit. ([XLIII.] ADDITIO. De jejunio et festis, 454.)
- 76) Catholici cum parvulis ducenti hoc loco numerantur. Ungaricam, valachicam, turcicam et tartaricam norunt linguam: unde per Tartariam et Turciam quaque versum libero passu ire et redire possunt, solo hoc titulo quod sint Csöbör[csök]iensis. ([XLIII.] ADDITIO. De oppido Csöbör[csök], 454.)
- 77) Cf. Dr.Kós, i.m., 104.
- 78) Halász, i.m., 12. 注 (27) を参照。
- 79) 「チャーンゴ人」を固有の一民族集団と見做すことと、その民族集団内の多様性を最大限に承認することとは、一見矛盾するようにも見えるが、文化が「結合手」と「受容体」のモデルで模式化される、当然に実体は存在するが、伸縮自在で絶え間なく変容する「二次元的な広がり」として理解できることは、旧著においてすでに示した通りである。譬えるならば、人は回転する独楽が絶えず軸を移動させ、傾きを変化させていることを知っているが、そこに回転する独楽が存在しないとは思えない。あるいは、富士山自体の存在を疑う者はないであろうが、富士山の裾野がどこまでなのかを論じることは、それが無限に定義できるという意味において、無意味である。人の数だけの富士山が存在するということは、決して富士山の存在に抵触する事柄ではないのである（戸谷 浩『ハンガリーの市場町——羊を通して眺めた近世の社会と文化』彩流社、1998年、107-116頁）。